

# 初期外邦測量の展開と日清戦争

小 林 久美子  
山 渡 理 絵  
近 辺 茂

【要約】 日本が一九四五年八月までアジア太平洋地域について作製した地図を外邦図とよぶ。外邦図の作製は、明治初期に既存の地理情報の編集から始まるが、現場での測量をともなう本格的な地図作製は、日清戦争時に編成された臨時測図部以降とされてきた。他方筆者らは、アメリカ議会図書館で、一八八〇年代に日本軍将校が作製した、中国大陸・朝鮮半島・台湾の手描き原図を大量に発見した。本稿ではこの概要を紹介し、将校らの偵察旅行、測量技術、さらにそれらにもとづく二〇万分の一図の編集を検討した。その結果将校らの旅行は、現地側が派遣する護衛が随伴するなど、基本的にその承認を得ていたこと、測量の精度は高く、密度も低くて、日清戦争にあわせて準備された二〇万分の一図は、主要交通路とその結節点を描く点と線の図にならざるを得なかったことが判明した。ただし、独自の測量活動に基づいており、この時期を「初期実測時代」とするのが適切とした。

史林 九三巻四号 二〇一〇年七月

## はじめに

一九四五年八月まで、日本がアジア太平洋地域について作製した地図を外邦図とよんでいる<sup>①</sup>。外邦図の作製は、明治の比較的早い時期から開始されたことが知られているが、本格的な展開は日清戦争以降と考えられてきた。日本近代の地図作製史を記述する『地図・測量百年史』では、「清國渤海地方圖」（陸軍参謀局、一八七四年）「清國北京全圖」（同、一八七五

年)、「朝鮮全圖」(同、一八七五年)など、外国資料による初期の編集図の存在を指摘するが、これ以降の外邦図作製については、日清戦争時に編成された臨時測図部(第一次)によるものとしている。<sup>②</sup> 初期の編集図作製から臨時測図部(第一次)の編成まで、約二〇年間の外邦図作製については、戦前期よりこの方面の調査を行ってきた高木菊三郎が、陸軍将校の「旅行図」および他の資料をもとに「韓国二十万分一図」などが編集・印刷されたことをみじかく指摘している程度である。<sup>③</sup>

二〇〇八年三月、筆者らはワシントンのアメリカ議会図書館で外邦図の調査をするうち、一八八〇年代に日本軍将校が朝鮮半島ならびに中国大陸、さらに台湾について測量・作製した手描き原図の存在を知ることとなった。現在は同館地理・地図部の協力をえて、調査を継続しているところで、全四〇〇点以上に達するのは確実である。

手描き原図に記入された作製者の氏名は、高木が示す旅行図の提出者の氏名<sup>④</sup>だけでなく、村上勝彦が『參謀本部歴史草案』によって検討した、同時期に東アジアで「軍事密偵」として活動した陸軍将校の氏名<sup>⑤</sup>ともほぼ一致し、彼らが各地の視察にくわえて、これらの手描き原図に結びつく測量を行っていたことが明らかである。またこれらに示された彼らの活動範囲は、朝鮮半島全域にくわえ、中国大陸の沿海部を中心に広範囲におよんでいる。

陸軍将校の活動がこのように持続的かつ広範囲に行われた点は、高木菊三郎のいう「旅行図」の作製が明確な目的をもつて計画的に実施されたこと、さらにその大きな目的が東アジアの地理情報の収集にあったことを示している。これに関連して、後述するように、陸軍将校の収集した情報の一部が、当時刊行が開始された『東京地學協會報告』に掲載されたことも、あわせて留意すべきである。十九世紀には、西欧諸国で相次いで地理学協会が設立され、世界各地の地理情報が報告された。東京地学協会もそうした地理学協会として設立されていた。<sup>⑦</sup> 軍事情報でもある地理情報が、このように公開されたことは、その性格を考えるうえで示唆的である。

本稿の目的は、ほとんど知られていないこうした陸軍将校の活動を中心に、東アジアに関する明治初期から中期の日本

の地図製作活動を概観し、その特色を示すところにある。将校の偵察活動とともに、測量に用いられた技術、さらに手描き原図の様式を検討し、それらをもとに刊行された地図の日清戦争における役割について考察をくわえたい。

以下ではまず、明治初期段階での東アジアにおける地図製作を展望し、あわせて当時の地理情報の取得を検討する（第一節）。つづいて、一八八〇年代の陸軍将校による朝鮮半島と中国大陸における調査活動を追跡する（第二節）。また彼らがおこなった測量の技術的特色を示しつつ、これによつて準備された地図の編集についてふれたあと（第三節）、日清戦争時におけるその役割にアプローチする（第四節）。

- ① 小林茂、二〇〇九、近代日本の地図製作とアジア太平洋地域、小林茂編『近代日本の地図製作とアジア太平洋地域——「外邦図」へのアプローチ』大阪大学出版会、二一—二六頁。
- ② 測量・地図百年史編集委員会編、一九七〇『測量・地図百年史』日本測量協会、四三九、四六〇、四七九頁。
- ③ 高木菊三郎著・藤原彰編、一九九二『外邦兵要地図整備誌』不二出版、三一八頁、高木菊三郎、一九六一『明治以後日本が作った東亜地図の科学的妥当性』高木菊三郎、九—一三頁。
- ④ 高木菊三郎、前掲書（一九六二）、九—一〇頁。ただしこのリストには、あきらかな誤りが認められる。
- ⑤ 村上勝彦、一九八一、隣邦軍事密偵と兵要地誌（解説）、陸軍参謀本部編『朝鮮地誌略1』龍溪書舎、三一—四八頁。
- ⑥ 小林茂・岡田郷子、二〇〇八、十九世紀後半における朝鮮半島の地理情報と海津三雄、待兼山論叢（日本学編）四二、一—二六頁。
- ⑦ 石田龍二郎、一九八四『日本における近代地理学の成立』大明堂、八七—一六九頁。

## 一 明治初期の外邦図作製

幕末期までの日本では、海外渡航は禁止されており、漂流のような特別な事情がないかぎり、海外の地理情報を直接日本人が入手することはできなかった。また日本本土の海岸および近海についてさえ、独力で海図を準備することもできなかった。海岸線については、伊能忠敬の実測図があったが、沿岸部の水深をはじめとする海側の情報はほとんどなかったのである。<sup>①</sup>このような事情のなかでも、明治初期になって、外邦図の作製が開始されたことは注目に値する。以下ではまずこのプロセスに焦点をあててみよう。

これに際してふれておくべきは、欧米諸国による海図作製のための測量である。イギリス・アメリカ・フランス・ロシアは、十九世紀中頃以降、日本をふくむ東アジア諸国で海岸測量をさかんにおこなった。明治になってからも、イギリスは自前で測量できない日本政府にかわって、シルビア号、さらにはフライング・フィッシュ号によって瀬戸内海や北海道沿岸の測量を実施した。

このような欧米側の測量は、「万国公法」にみられるような西欧的な世界観を背景としていたことはあらためていうまでもない。ロジャーズのひきいるアメリカ艦隊が一八五五（安政二）年に幕府に提出した測量許可願いでは、海難が起こるような難所を秘密にするのは、友好国に対してすべきことではないとしつつ、欧米諸国はその港を示した海図を外国にも販売していると述べて、日本近海での測量の承認をもとめている。幕府はこの申請を拒否したが、外国船の測量を阻止することはもちろんできなかった。<sup>③</sup>

このような世界観に関連して興味ぶかいのは、外務省よりシルビア号に派遣された日本人職員から鹿児島県に提出された要請書（一八七五「明治八」年）では、測量にあたる外国人が上陸して数日間滞在しても不作法のないようにすること、もし暴力沙汰が起これば、鹿児島県だけでなく、日本も万国に対して恥をかくことになる点である。<sup>④</sup> 欧米諸国が主導する世界に順応し、万国公法的な秩序をうけいれるには、他方で国土の末端部にまでこれを浸透させる必要があった。こうした欧米船の沿岸測量は、他の地域でも進行的な中国における測量史の集成である『中国測繪史』では、「外国人在華非法測繪」と題する章をもうけて、この種の測量についてふれている。<sup>⑤</sup> またフランス艦隊やアメリカ艦隊の朝鮮遠征（一八六六年および一八七一年）の場合のように、武力行使にあわせてこれが行われることもあった。<sup>⑥</sup>

一八七五（明治八）年に江華島に近づいて朝鮮側の発砲をうけ、これにに応じて陸戦隊を上陸させて、朝鮮開国のきっかけを作った日本の雲揚号の航海が、測量を目的に掲げていたことは、関連して注目される。<sup>⑦</sup> 万国公法に順応することは、他方で、欧米諸国と同様に、他国の海岸に近づき、強引な測量を行うことを正当化することでもあった。

強引な測量によるものとはいえ、このように先行して作製された海図は、他方で、陸上を対象とする外邦図の作製に際し枠組みとして利用された。東アジアでは、近代的な測量はまず海岸についておこなわれたのに対し、内陸部については大きく遅れた。そのため、一時期は、天測を主体とした精度の高い海図に海岸線の情報を依存しつつ、内陸部の地図が作製されていたのである。つきにこれについてみていこう。

「朝鮮全圖」（一八七五「明治八」年）は、初期の外邦図の例としてよく名前があげられる図で、縮尺は百万分の一で、経度・緯度も示されている。この図の左下にみられる例言では、つぎのように記している。

此圖ハ朝鮮八道全圖大清一統輿圖、英米國刊行測量海圖等ヲ參訂シ之ニ加フルニ朝鮮咸鏡道ノ人某氏ニ就キ親シク其地理ヲ諮詢シ疑ヲ質シ謬ヲ正シ以テ製スル所タリ

まず海岸線や経緯度は、イギリスやアメリカの海図によったことが明らかである。また海岸や島のところどころに西欧語のカタカナ表記の地名がみられるのは、測量者が現地地名を確認せずに命名したものを、そのまま転載したものと考えられる。こうした西欧語の海岸付近の地名は、海軍水路寮が一八七六年に刊行した、ロシアとイギリスの海図による「朝鮮東海岸圖」<sup>⑧</sup>だけでなく、ロシアとイギリスの海図の地理情報にくわえ、日本の測量艦の成果もあわせて、海軍水路局が一八八二年に刊行した「朝鮮全岸」<sup>⑨</sup>にもみえている。

朝鮮全図でさらに注目されるのは、江華島から漢江、さらにソウルにいたる部分で、上記フランス艦隊による偵察測量の成果を反映している点である。フランス艦隊の海図の成果を取り入れたアメリカの海図を参考にしたものであろう。<sup>⑩</sup>

これに対し、内陸部は朝鮮や清国の地図によっている。「朝鮮八道全圖」は、類似の名称の図が多くあり、実際に使用したのはどの図になるか検討を要する。朝鮮全図の詳細さを考えると、一枚の図に朝鮮全体を描くような図ではなく、「東國地圖」（一八世紀中期）<sup>⑪</sup>のように、朝鮮の各道が、別々の図にくわしく書かれたものであったと考えられる。他方、「大清一統輿圖」は「皇輿全覽圖」（一八世紀初頭）の系統を引くものと考えられ、「皇朝中外壹統輿圖」（一八六三「同治

「二年刊」<sup>②</sup>がそれにあたるといわれるが、図が粗すぎ、また朝鮮国境も示されておらず、他の地図をさらに検討する必要がある。

くわえて、地理に詳しい咸鏡道出身者の協力も得ていた。この人物は W. E. Griffis の *Corea, the Hermit Nation* がふれる *Kim Rinsio* <sup>③</sup> で、金麟昇というウラジオストクの近隣に居住していた朝鮮人知識人であった。<sup>④</sup> 金は一八七五年六月に来日し、「お雇い外国人」として情報提供を行い、翌年には江華島条約の締結を行った黒田清隆の外交団に随行した。

なおこの「朝鮮全圖」は、上記 *Corea, the Hermit Nation* の付図 (*Map of Cho-sen or Corea* 三百万分の二) だけでなく、一八八三年にドイツで刊行された *Korea oder Tschosen der Japaner* (Gotha: Justus Perthes, 百七十万分の一) の元図として利用された。後者はさらに英訳して *Korea or Cho-sen of the Japanese* というタイトルで一八九四年以降に刊行された。<sup>⑤</sup> 鎖国状態を続けてきた朝鮮の地理情報として、国際的に評価されたことになる。

海岸部を外国製の海図により、内陸部を当該地域の地図により作製するという手法は、中国大陸についても適用された。「清國沿海各省圖」として作製されたものは、「沿海輪廓ハ英國海圖ニ基キ且内部者一統輿圖及道中記等ヲ以テ毎省切圖ニ調製」するように指示されている。<sup>⑥</sup> ここでも内陸部については「一統輿圖」が登場し、旅行記類の参照もすすめるが、

「清國江蘇省全圖」(七〇万分の二)の場合、やはり上記「皇朝中外壹統輿圖」に類似せず、他の地図によったと考えられる。このような海外の地理情報への依存は一八七四(明治七)年の台湾出兵でもみられた。日本の外交顧問として、国際情勢の判断から清国との折衝まで大きな役割を果たしたフランス系アメリカ人、ルジャンドル(リゼンドル、李仙得) <sup>⑦</sup> は、他方で台湾の地理情報も提供した。彼は、台湾南部で難破したアメリカ船ローバー号の乗組員が先住民に殺害された事件に関連して、廈門領事としての活動経験をもとに、台湾の地理情報も収集しており、やはり台湾南部で遭難した宮古島民の殺害について、類似の問題に直面していた日本にこれを積極的に提供することになった。中国側の領土観に対して、万国公法的な西欧的領土観を対置しつつ、台湾の東部は清国領でないと主張するルジャンドルは、その範囲を明確にするため

に、先住民のうち「生蕃」といわれた人びとと漢人の居住域を区画する境界を示す地図 (*Formosa Island and the Pescadores, China, 1870*) をすでに刊行していた。一八七二(明治五)年九月に、アメリカ公使デロングが外務卿の副島種臣に提示した、ルジャンドル収集の台湾の地図にこの図が含まれていたことが確実である<sup>⑧</sup>。さらにルジャンドルは、日本軍の遠征がめざす台湾南部について、自らの調査ルートを付した地図も提供した。これは「臺灣南部之圖」というタイトルで、和文の説明をつけて印刷された<sup>⑨</sup>。

また、この出兵に関連した情報収集のため台湾に派遣された樺山資紀は、一八七四(明治七)年三月、打鼓(高雄)のイギリス領事館員に台湾の地図の提供を要請するほか、アメリカ人がイギリス人と思われる宣教師の作製した地図と思われるものを同行の日本人に贈写させた<sup>⑩</sup>。

- ① 幕府は一八四二(天保二三)年と一八四九(嘉永二)年に各藩に対し水深を記入した海岸絵図の提出を求めた。ただし測量技術が充分でなく、長い海岸線のカバーできるはずもなかった。川村博忠、一九九九、幕府命令で作成された嘉永年間の沿岸浅深絵図、地図(日本国際地図学会)三七(一)、一―一四頁。
- ② ビーズリー、W・G、二〇〇〇、衝突から協調へ――日本領海における英国海軍の測量活動「二八四五―一八八二年」、木畑洋一ほか編『日英交流史二六〇〇―二〇〇〇、1』東京大学出版会、九九―一二二頁、横山伊徳、二〇〇一、一九世紀日本近海測量について、黒田日出男、メアリ・エリザベス・ベリ、杉本史子編『地図と絵図の政治文化史』東京大学出版会、二六九―三四四頁。
- ③ 守屋嘉美、一九九四、安政二年の米国船測量願いについて、東北学院大学論集(歴史学・地理学)二六、一〇五―一五一頁。
- ④ 大島資料、諸令達、第三十八号、改訂名瀬市史編纂委員会、一九九六『大島喜界両島史料雑纂』改訂名瀬市史編纂委員会、二三一―二四頁。
- ⑤ 《中国測繪史》編輯委員会編、二〇〇二『中国測繪史、第二卷』測繪出版社、五一四―五二二頁。ただし、一九世紀末になると英国製海図によって、自国沿岸の海図を作製している(同五〇八―五二二頁)。
- ⑥ 奥平武彦、一九三五『朝鮮開國交渉始末』刀江書院、一九一―三二頁、李成茂著・金容権訳、二〇〇六『朝鮮王朝史(下)』日本評論社、四〇二―四一六頁。
- ⑦ 奥平武彦、上掲書、四三―四四頁。
- ⑧ 国立公文書館内閣文庫、ヨ五五八―〇〇八八―一〇〇。
- ⑨ 国立公文書館内閣文庫、ヨ五五八―〇〇八八―一九八。
- ⑩ 国立国会図書館蔵『Plan croquis de la rivière Hang-Kang ou de Seoul depuis son embouchure jusqu'à Seoul (72,5×104,5cm 日本語タイトル「漢江口ヨリ京城ニ至ル河圖」ただし印刷図を手書きで模写[YG―アジアーズ―二二二八)』ならびに『Approaches to Seoul River & Salet River with the Fort Taken by a Force from the Asiatic Fleet (二図をあわせて掲載) 64.6×86cm 日本語タイトル「朝鮮國小陵河口近

傍実測圖」印刷図を手書きで模写〔Y.G.アジアーズ—1113〕。

⑬ 李燦著、楊普景監修、山田正浩・佐々木史郎・渋谷鏡明訳、二〇〇

五『韓國の古地圖』ソウル・汎友社、一〇六一—一七頁。

⑭ 趙榮・楊正泰、一九九八『中国地理学史（清代）』北京、商務印書館、一三八頁。

⑮ Griffis, W. E., 1882. *Corée, the Hermit Nation*, New York: Charles Scribner's Son, 213頁および付図の注記。

⑯ 崔書勉、一九七八、日本外務省御雇外国人『金麟昇』について、韓七（六）、九四—一二二頁。

⑰ Washington, D.C.: Norris Peters.

⑱ アジア歴史資料センター資料「清国沿海各省図製作の方法」参謀本部大日記、明治十二年一月、C07080084800。清国沿海各省図の対象

になったのは、直隸・山東・江蘇・安徽・浙江・福建・広東・広西の各省であった。

⑲ 小林隆夫、一九九四、台湾事件と琉球処分（Ⅰ）（Ⅱ）、政治経済史学三四〇、一—一六頁、三四一、一三—三三頁。

⑳ 「壬申九月廿三日外務卿副島種臣米利堅合衆國公使シイデロングエ應接記の内」外務省編、一九五五『日本外交文書（一〇）第七卷』日本外交文書頒布會、五頁。

㉑ 国立公文書館内閣文庫蔵、一七七一—〇六一。

㉒ 西郷都督樺山總督記念事業出版委員會編、一九三六『西郷都督與樺山總督』西郷都督樺山總督記念事業出版委員會、資料編、二八八—二九四頁。

## 二 陸軍將校による実測の展開

以上のような状況の中で、陸軍將校の海外派遣は早くからはじまった。ただし地図製作を主目的とした派遣の本格的開始は、後述するように、一八七九（明治一二）年以降となる。以下ではまず、それにむかう推移から追跡する。なお、外国人の入国や旅行が比較的容易であった中国大陸に対し、朝鮮半島ではこれが厳しく規制され、將校の活動の展開をみるには、両者を区別して考える必要がある。以下では、くりかえして將校による測量がこころみられた朝鮮半島の場合から検討する。

### 1 朝鮮半島

近世の外交関係を清算して、朝鮮との近代的な国交の構築をめざしていた明治政府は、その窓口になっていた釜山にた



びたび使節を送ったが、朝鮮側は変化を望まず、急速な展開はのぞめなかった。一八七二（明治五）年に花房義質のひきいる使節団が派遣され、長く対馬藩が運営してきた草梁倭館を接収した。これに随行した陸軍将校が北村重頼（少佐）・河村洋興（同）、別府景長（晋介）（大尉）で、『西南記傳』によれば、このうち北村と別府が「韓服を着け、釜山より上陸して、三南地方を視察」したという。<sup>①</sup>

すでにふれた江華島事件（一八七五「明治八」年）をうけて、その翌年一月からはじまった朝鮮との外交交渉でも陸軍将校が同行した。特命全権弁理大臣黒田清隆がひきいる外交団には、少将の種田政朋、中佐の樺山資紀以下、少佐一名、大尉三名、中尉・少尉各四名が参加している。交渉が江華島でおこなわれたうえ、測量作業について朝鮮側から詰問をうけており、十分な活動はできなかったと考えられるが、『陸軍省年報』第八年報が記載する、「自江華島草芝鎮至江華府路上圖」<sup>②</sup>はこの時に作製されたものであろう。またこの将校の中には、のちに朝鮮半島の測量で活躍する磯林真三（当時少尉）にくわえて、すでに中国に派遣されていた益満邦介（同）が含まれていた。

この外交団によって、日朝修好条規（江華島条約）が締結されたが、その付則について交渉するため、同年の七月に外務大丞の宮本小一を代表とする使節団が派遣された。これには上記の外交団にも参加した勝田四方蔵（大尉）と益満邦介が参加し、くわしい記録（陸軍士官朝鮮紀行）を残している。<sup>④</sup>それによれば、勝田らを派遣したのは陸軍卿の山縣有朋で、その任務は「地理兵制等軍務ニ須要ナルモノヲ探偵」することであった。

この使節団は、朝鮮側の厳しい規制でソウル市内や郊外を自由に散歩することもできなかった。また帰途には、釜山まで陸行することを希望したが、これも拒否された。これらのため、測量はほとんどできなかったと考えられる。

この使節団で注目すべきは、朝鮮側に各種の書物を贈っており、その中には兵法書のほか、「亜細亜圖」、「地球輿地全圖」、「地球儀」などのほか、「朝鮮全圖」、「高麗西岸塩河圖、第一、第二」、「朝鮮小陵河之圖」、「朝鮮東海岸圖」が含まれていることである。このうち「朝鮮全圖」は上記の同名の図、「高麗西岸塩河圖、第一」は、上記のフランス艦隊遠征

時の海図にもとづき海軍水路寮が作製した図、「朝鮮東海岸圖」はすでにふれたロシアとイギリスの海図によって作製した図と考えられる。また「朝鮮小陵河之圖」はやはりフランス艦隊の海図にもとづく「高麗西岸小陵河之略圖」の可能性が高い。

当時としては最新の地図と海図が贈与されたのは、万国公法的な世界観から、日本側がもっている地理情報を開示することにより、朝鮮側に地理情報の開示を要請するという意図があつた可能性がある。欧米の地理情報が日本の地図作製にも利用されていることを示しつつ、その共有が常識となつていくことを明示しようとしたと考えられるのである。関連して、朝鮮側から「朝鮮全圖」、「漢城圖（朝鮮都府略圖）」（いずれも日本側が付したタイトルと考えられる）が提供された。日本側の要請に応じたものではあるが、同時に地図の贈与に対する答礼であつた可能性もある。上記「陸軍士官朝鮮紀行」では、前者を粗製の地図としつつも、地名と里程が役に立つとしている。後者は、同時代につくられていたソウルの図と比較すると、縮尺が小さく、あきらかに申し訳程度の図である。

他方、使節団がソウルで交渉に当たっているあいだ、海軍士官が連絡のため海岸部（仁川付近）とソウルのあいだを何度か徒歩で往来した。この場合、朝鮮側の案内者は毎回ルートを替え、険しい道に彼らを導いたという。

一八七七（明治一〇）年九月―十二月には、花房義質を代表とする使節団の派遣がおこなわれた。その目的のひとつは、釜山以外の二つの開港地の選定であつた。このため、測量船により、釜山に寄港したあと沿岸測量をくりかえして仁川付近に至っている。随伴した海津三雄（少尉）・下村修介（十三等出仕）の報告である「明治十年朝鮮記事」から、ときには小蒸気船に乗って上陸し、開港地となる可能性のある海岸を検討した。こうした沿岸測量は、日朝修好条規第七款によって可能になつたものである。

この使節団でまず注目されるのは、海軍少尉の児玉包孝と高杉春棋がソウルから仁川、済物浦までの地図を作製した点である。前年に海軍士官がソウルと仁川付近を往来した経験をふまえて、徒歩旅行をおこなつたものであろう。つぎに注

目されるのは、使節団が朝鮮側の指定した通津経由の遠回りのルートでソウルに至った行程について、花房義質が輿に乗った随行者に命じて、方位や歩行時間をはからせ、地図を作製したことである<sup>⑬</sup>。この地図はソウルに至るには、仁川（清物浦）に上陸するのが最も適当なことを、主張するのに役立ったという。

こうした日本側の努力に対し、朝鮮側が自国の地理情報を知られないようにしたいと望んでいたことは、すでにふれた使節団員の行動範囲の規制だけでなく、花房の朝鮮側との交渉記録<sup>⑭</sup>にもあらわれている。

やはり花房義質がひきいる一八七九（明治一二）年の使節団でも、開港候補地に関連して「朝鮮鎮江略圖」、「自古温浦至漢城略圖」を作製した<sup>⑮</sup>。後者は、海津三雄（中尉）が牙山湾口に上陸して、水原を経由してソウルまで徒歩旅行をおこなって作製したものである。また海津は、ソウルから清物浦まで歩き「自漢城至齋物浦略圖」を作製した。さらに日本への帰途には開港が決定されたばかりの元山（東海岸）に立ち寄った際には、「元山津居留地略測并埠頭道路目論見圖」も作製した。

一八八〇（明治一三）年には、ソウルに日本公使館が開設され、陸軍将校も駐在するようになった。それにあつた水野勝毅（大尉）、松岡利治（中尉）、千原秀三郎（軍曹）は、ソウルをとりかこむ山稜を歩いて、「朝鮮京城圖」を作製している。

兵士の反乱にはじまり、群衆による日本公使館の襲撃、花房義質公使をはじめとする日本人の避難、さらには清物浦条約の締結によるその收拾と展開した一八八二（明治一五）年の壬午事変は、同時に以上のように進行してきた朝鮮国内の測量や地図作製を大きくかえることになった。その第一はこれを契機に朝鮮半島について作製された地図が一律に印刷されたことである。当時参謀本部がいだくに至った軍事的緊張感を反映したもので、軍事行動が予想される朝鮮半島の地図がまず必要とされたと考えられる。参謀本部の地図課で、この時期に職員に「定時限外勤務」をおこなわせているのは、これに対応するものであろう。ただし、「陸軍省年報」にみえる朝鮮半島に関連する印刷図はわずかで、朝鮮半島のごく一部をカバーするにすぎなかった。

もうひとつの変化は、清物浦条約とともに締結された日朝修好条規続約第二によって、日本公使、領事及びその随員は朝鮮国内を旅行できるようになったことである。<sup>②③</sup>以後ソウルの公使館、釜山・元山の領事館に配属された陸軍将校が領事館員として朝鮮半島を旅行し、主要交通路の測量を行うようになる。彼らが作製した手描き原図（アメリカ議会図書館蔵）、さらにその利用については別稿<sup>②④</sup>でくわしくふれているので、参照していただきたい。ここでは、彼らの旅行についてふれておくことにしたい。

陸軍将校の朝鮮国内旅行は、参謀本部からの指示されたコースを巡歴するもので、その際、日朝修好条規続約第二にしたがい、旅行地域を指定して朝鮮側（禮曹）から「護照」を得る必要があった。参謀本部から外務卿に依頼し、ソウルの公使館より、その交付の申請をおこなった。<sup>②⑤</sup>一八八三（明治一六）年にはじまる最初の旅行に際しては、磯林真三（大尉、ソウル公使館付）、海津三雄（大尉、元山領事館付）、渡邊述<sup>②⑥</sup>（中尉、釜山領事館付）の三名の旅行申請に対して、まず許可が下りたのは磯林だけであった。『参謀本部歴史草案』によれば、朝鮮側は三名が同時に旅行をおこなうと、その安全の確保が困難と考え、まず磯林だけに許可をあたえたという。<sup>②⑦</sup>

実際の旅行に際しては、やはり日朝修好条規続約第二により、地方官の「勘照護送」（護照の検査と護送）をうけることになっていた。やや遅れて許可を得た海津が、一八八三年六月から八月にかけておこなった旅行の場合、『東京地學協會報告』の記事に「當初徳源（元山に近い都護府所在地）ヲ出ルヤ護照ノ明文ニ從テ本府派スル所ノ卒一人ヲ率ヒ……」（カック内引用者）<sup>②⑧</sup>と述べ、規則どおりに地方官の派遣する役人をもたずて出発したことがわかる。また、各地でその出迎えのほか、接待も受けたことも記している。

またやはり海津の記事から、日本人の「同行ノ者」がいたことがわかる。これは「御用掛」と呼ばれ、海津には川本準作が、渡邊には武田甚太郎が随行した。このうち武田は一八八〇（明治一三）年に陸軍省の「朝鮮國語生徒」を申し付けられており、<sup>②⑨</sup>また磯林についても、やはりこの「朝鮮國語生徒」から選抜したものの随行が予定された。<sup>②⑩</sup>いずれも、

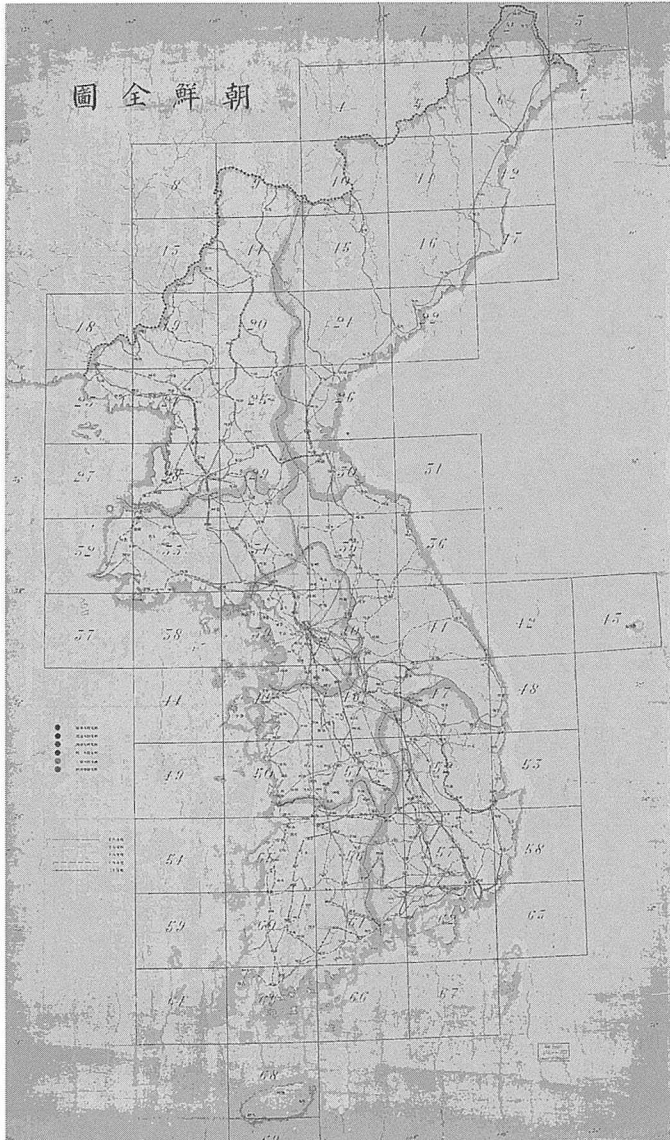


図1 「朝鮮全圖」アメリカ議会図書館蔵 (G7900 1887 K3 Vault) 113×67cm

通訳としての役割が大きかったと考えられる。これに関連してさらに言及すべきは、上記川本準作が「朝鮮國語学生徒」の名簿では姓が一時的に変わって津吉準作として登場すると考えられること、また一八七二（明治五）年に対馬に設置された厳原韓語学所の生徒であったこと、さらに武田がこの厳原韓語学所を廃止して釜山に一八七三（明治六）年に設置さ

れた草梁倭館の語学所の生徒であったことである。<sup>⑤</sup>

村上勝彦が示した陸軍士官の活動経過およびアメリカ議会図書館所蔵の手描き原図に記された年代から、磯林・海津・渡邊にはじまる朝鮮国内の旅行は、他の陸軍将校にうけつがれたことがわかる。一八八四(明治一七)年の甲申政変に際しては、磯林真三らが群衆に殺害されるという事態も発生したが、一八九一(明治二四)年まで継続した。ただしさかんにおこなわれたのは一八八八(明治二一)年までであった。図1は、彼らのうち磯林・海津・渡邊のほか、岡泰郷・三浦自孝・柄田鑑次郎の旅行ルートを年次別に示すもので、その測量活動をよく示している。

朝鮮半島におけるその後の陸軍将校の活動で留意されるのは、満洲でも外邦測量に従事した倉辻明俊(靖次郎)による、一八九三(明治二六)年九月以降の二〇〇日以上にわたる旅行である。陸地測量手の藤田五郎太をともなっており、これは陸地測量部の開設(一八八八[明治二二]年)以後、最初の測量技術者の外邦測量とされているが、アメリカ議会図書館所蔵の手描き原図には、関連するものがみつからない。

## 2 中国大陸

中国大陸への陸軍将校の派遣も、最初は一八七二(明治五)年で、池上四郎、武市正幹、彭城中平(外務権中録)が派遣された。<sup>⑥</sup>池上・武市は外務省出仕として命令をうけたが、それは表面上のことという。<sup>⑦</sup>また池上は西郷隆盛の側近であり、この派遣の目的が政治・軍事情報の収集にあったことは、彭城執筆の復命書(一八七三年七月)<sup>⑧</sup>に明らかである。

つづく派遣は翌年の一八七三年末に指令された。美代清元(中尉)を中心とした六名にくわえ、島弘毅(中尉)などの同行も指示された。<sup>⑨</sup>このときに下附された「心得書」の大綱案の第一条には、「彼国ニ在テ彼国ノ事ヲ学ハント欲セハ彼国ノ語学ニ通曉セサルベカラス故ニ此レヲ以テ最初ノ専務トス」として、語学学習を重視している。これにつづく「心得書條目案」は大きく三つに分かれており、清の軍備に関することは美代らの担当、地理や人口に関することは、すでに朝

鮮での活動にふれた益満らの担当、政治や政府、税制、外交などに関することは他の将校・下士官の担当とされている。<sup>⑦</sup>ただし、地理に関する調査項目には、測量や地図作製は含まれていない。また一八七四年七月の清在留者の名簿によれば、全員北京駐在であった。<sup>⑧</sup>なお、この時期には、台湾出兵に関連して、大尉の大原里賢など七名の派遣もおこなわれており、上記の清在留者名簿によれば、その在留地は広東・鎮江・福州であった。

その間、益満は「清国北京圖」や「北京白河之地圖」、さらにイギリス製海図や「長江図説」と地図類を購入した。<sup>⑨</sup>また、本稿の冒頭でふれた「清國北京全圖」の注記に、英国製の測量図をもとにしつつ、「京師城内圖」などで地名を補い、さらに自身が清国で目撃したことをもとに誤りを訂正し、この図を作製したと述べ、その活動の一端を示している。

一八七五（明治八）年には、初めての在外公館つき武官として福原和勝（大佐）が在清国公使館に派遣され、さらに翌年になると、大原里賢がとりまとめていた清国在留将校たちを、再度派遣された福原が監督するようになる。<sup>⑩</sup>これはその組織化がはかられたことを示すものである。ただし将校は上海、漢口、広東、北京に分散配置されていた。

この時期の将校のなかで、島弘毅が『東京地學協會報告』に紀行文「滿州紀行拔書」、「清國運河紀行」を掲載している。前者の旅行は一八七七年に、後者の旅行は一八七五年におこなったとしている。<sup>⑪</sup>島の滿洲における旅行は広範囲におよび、その成果である三〇〇万分の一の「滿州紀行附圖」は、既存の図に自身の観察をくわえたものと考えられる。<sup>⑫</sup>

福原は一八七七（明治一〇）年一月には日本によびもどされて西南戦争に従軍し、<sup>⑬</sup>そのごは大原らが駐在したようであるが、翌一八七九年までに将校たちは順次帰国した。<sup>⑭</sup>

この間、参謀本部が設立されるとともに（一八七八「明治二」年二月）、中国大陆における陸軍将校の活動は大きく変化する。一八七九（明治二）年六月、管西局長の桂太郎中佐は「方今清國朝鮮沿海ノ地誌並ニ地圖ヲ詳カニシ有事ノ日ニ當テ其ノ参画ノ圖略ニ供スルハ目下緊急ノ用務」として、地理情報の収集を主体にした将校の派遣を実施に移したのである。これにあわせて中心的役割をはたす将校のための「管理將校心得」さらに「清國派出將校心得」を示している。後

者の「地形風土」の節には各地での観察の成果を「圖誌二記シ或ハ看取圖ヲ製シテ以テ將來ノ用ニ供ス可シ」と地図の作製を義務づけている。さらにつづけて「但シ寫圖筆記ニ係ハラス之ヲ作ルハ成ル可ク彼■ノ嫌疑ヲ避ルノ法ヲ用ユ可シ」と述べて、疑念をもたれないよう作業することを指示している。<sup>⑭</sup>

これにしたがつて中国大陸にまず派遣されたのは、長瀬兼正ら一一名で、以後続々と派遣された。<sup>⑮</sup> またあわせて「支那語通譯生」の養成もおこなわれることになった。これは上記の「朝鮮國語學生徒」と並行して開始されたもので、やはり派遣された將校の通訳としての役割も期待された。中国大陸におけるこの時期の派遣將校の組織やその変遷については、朝鮮半島の場合と同様、村上勝彦の詳細な研究があるのでそれにゆずり、以下では彼らの旅行と測量に焦点をしばらくしたい。

この時期に中国大陸へ派遣された將校も『東京地學協會報告』に報告を掲載している。そのなかで、活動をよく示すと思われるのは、一八八〇（明治一三）年に清國公使館付として派遣された梶山鼎介（少佐）の「鴨綠江紀行」である。一八八二年九月四日の盛京（奉天、現在の瀋陽）の視察記録にはじまり、遼陽や鳳凰城、さらに鴨綠江河口部の大東溝までの道路・集落等の状況を日記風に述べている。また途中、やはり派遣將校の伊集院兼雄（大尉）との邂逅についてもふれ、お互いに情報を交換した。日清戦争や日露戦争の戦場となる、鴨綠江沿いの平野を望む九連城については、その軍事的重要性を指摘する。<sup>⑯</sup> 梶山の報告では、自作の通過ルート地図を掲載していることも注目される。当時の常識からすれば、この程度の地図の公開は問題ないものと判断されたことがうかがえる。

梶山は公使館付で、清國駐在將校や語學生徒の管理をおこなう立場にあり、外交關係を通じた明確なステータスをもっていたので、その旅行の様式は他の將校とちがっていた可能性が大きい。盛京の宿泊先では盛京省の軍政の責任者である盛京將軍の岐元のとりはからいで、清國側の兵二名の護衛がつき、さらに盛京から遼陽城までは、「練軍騎兵」二名の護衛をうけたとしている。<sup>⑰</sup>

なお、梶山以外の將校について、旅行に関する「護照」の取得や携帯がわかる例がみられる。一八八〇年に派遣された



小川又次（少佐）は、清国入国後、地方旅行にでる前に北京で護照を取得することが指示された。また、一八八八年に国境を越えて朝鮮にはいろうとした柴五郎（中尉）も清国の護照を携帯していた。<sup>54</sup>『対支回顧録、下』では、この時期に派遣された将校の多くは、「身分を秘して旅行した」とされているが、この種の証明書なしに各地を旅行することはできなかったとみるべきであろう。ただし、これが関係当局からどのように交付されたか、検討を必要とする。

関連して、派遣将校がその滞在目的について、まわりの知人に時には虚偽の言い訳をしていたケースもあることによれておきたい。一八七九年～一八八二年に広東に滞在した島村干雄（当時少尉）の場合、「言語動作ノ末ニ到ルマデ自然常人ト異ナル処有之」ということで、親しい知人にも「其官ノ廻シ者ヲ疑ハレ、頗ル辨解ニ苦ミ」、当時航路を香港に延長しようとしていた三菱会社の社員と名乗り、その準備のための滞在を装っていたという。島村はさらに一八八四（明治一七）年に広東・福州駐在の陸軍士官取り締まりのため香港に在留することになるが、それに際しては、以前のような言い訳が通じず、香港の領事館員を名乗るようにしたいと申し入れることになった。<sup>55</sup>

ところで、梶山の旅行は基本的に馬車と思われる車両によっており、泥濘のため車が進まないことや、車輪が破損したことにふれている。中国大陸の場合、徒歩以外の手段で移動する場合はほかにもみられ、一八八一年一〇月に北京を出発して山東省から江蘇省にいたった酒匂景信（大尉）の場合、轎（駕籠）のほか馬車を使ったとしている。<sup>56</sup>また、一八八三年頃に四川省から湖北省を旅行した小田新太郎（大尉）<sup>57</sup>の場合は船も使っている。

これらの陸軍将校の地図作成の時期は、早いもので一八八〇（明治一三）年である。また現在確認しているもつとも遅いものは一八九一（明治二四）年であるが、多くは一八八八（明治二一）年までとなっている。その範囲は旧満州や北京周辺、沿海地帯だけでなく、内陸部の貴州省や雲南省におよび、日清戦争の戦場を大きく越える範囲に達した。

ところで、朝鮮における壬午事変の余波は、中国大陸に関する地図作製についてもみられる。この時期に「盛京省東部圖」、「盛京省南部圖」、「盛京省西中部圖」、さらに「直隸省東部圖」といった、朝鮮国境から北京付近にいたる大型の二

○万分の一図が印刷されることになる。<sup>⑧</sup>これらは、それまでの陸軍将校による測量の成果を集成するものであるが、範囲が限られるのは、まだ上記以外の地域の測量が進んでいなかったからであろう。

以上、朝鮮半島と中国大陸への将校の派遣と旅行について検討した。一八七二年以降、体制が整えられ、広域をカバーするようになったことが判明した。また測量が行われた地域で、将校がもっていたステータスについても一定の展望がえられた。つぎにこうした旅行における測量とその成果の編集について検討することにした。

① 黒龍會本部編、一九一一『西南記傳、下巻』、黒龍會本部、三三三頁。なお、別府は桐野利秋に、北村は板垣退助に近い人物である。

② アジア歴史資料センター資料「使鮮日記」、明治八年、Ref. B03023619300。

③ 『陸軍省年報』第一巻、龍溪書舎（一九九〇年）、六四頁。江華島関係図と考えられるものとして、ほかに、「江華島内江華城」、「江華島近海」がある。

④ アジア歴史資料センター資料「宮本大丞朝鮮理事始末九」、明治九年、Ref. B03030157500。

⑤ アジア歴史資料センター資料「宮本大丞朝鮮理事始末四」、明治九年、Ref. B03030154800。

⑥ 国立公文書館内閣文庫、海軍海図、ヨ五五八・八八D一三二。

⑦ 国立公文書館内閣文庫、海軍海図、ヨ五五八・八八D一三二。

⑧ 小林・岡田、前掲、はじめに注⑥、九頁。

⑨ たとえば金正浩による「首善全圖」（一八四〇年代）、李煥著、前掲一節注⑩、一〇五頁。

⑩ アジア歴史資料センター資料「明治十年朝鮮紀事」、明治十年、Ref. B03030183400。

⑪ アジア歴史資料センター資料「代理公使朝鮮日記」、明治十年、

Ref. B03030183700。この日記から、兎玉と高杉が測量要員であったことがうかがえる。

⑫ 『従朝鮮國揚花鎮至濟物浦陸路見取圖』（国立公文書館内閣文庫、一七七―一三六。この表紙には、「明治十年冬代理公使彼ノ京ニ入りシトキ海軍士官兎玉高杉等齎物浦ヨリ京地ニ往返シ該官等ノ圖セシモノナリ」と記している。

⑬ 桜井義之、一九五九、花房義質代理公使『入京路程概測図』について。朝鮮字報、一四、三六三―三七九頁。

⑭ アジア歴史資料センター資料「朝鮮國代理公使花房義質復命書」、明治一年、Ref. A01000051300。

⑮ 国立公文書館内閣文庫、一七七―一三三、同、一七七―一〇一。

⑯ アジア歴史資料センター資料「明治十二年代理公使朝鮮事務始末抜粋」の「復命概略」、明治二年、Ref. B03030245600。

⑰ 国立公文書館内閣文庫、一七七―一〇一。

⑱ 海津三雄、一八八〇、元山津之記、東京地学協会報告、一（六）、六一―〇頁。

⑲ 国立公文書館内閣文庫、一七七―一〇七。

⑳ 遠藤芳信、二〇〇八、日露戦争前における戦時編成と陸軍動員計画思想（八）―一八八二年朝鮮壬午事件に対する日本陸軍の対応と動員、

- 北海道教育大学紀要（人文・社会科学）五八（二）、五七—七三頁。
- ②1 アジア歴史資料センター資料「定時限外勤務人員の件」明治一五年一月、Ref. C07080869600°。
- ②2 全一点にすぎない。「陸軍省年報」第二巻、龍溪書舎（一九九〇年）、六七頁。
- ②3 武田勝蔵、一九二九「明治十五年朝鮮事変と花房公使」武田勝蔵、七九頁および村上、前掲はじめに注⑤。
- ②4 渡辺理絵・山近久美子・小林茂、二〇〇九、一八八〇年代の日本人将校による朝鮮半島の地図作製——アメリカ議会図書館所蔵図の検討地図（日本国際地図学会）四七（四）、一一—一六頁。
- ②5 アジア歴史資料センター資料「礮林歩兵大尉外四名ヲ朝鮮ニ派遣」明治一六年二月、Ref. C07080380700°。
- ②6 渡辺の名前は「述」ではなく、「述」の可能性がある。
- ②7 広瀬順睦監修・編集、二〇〇一「参謀本部歴史草案」第2巻、ゆまに書房、一七四—一八六頁。なお旅行中の将校の安全については、朝鮮国王自身も大きな懸念を示したという（同一一八三—一八四頁）。
- ②8 海津三雄、一八八四、朝鮮北部内地の実況、義州行記、東京地学協会報告、六（一）、三〇—四一頁。
- ②9 アジア歴史資料センター資料「武田基太郎他九朝鮮語学生徒申付等の件」明治一三年二月、Ref. B07090446200°。
- ③0 アジア歴史資料センター資料、前掲「礮林歩兵大尉外四名ヲ朝鮮ニ派遣」（本節注②5）。
- ③1 松原孝俊・趙貞瓊、一九九七、厳原語学所と釜山草梁語学所の沿革をめぐって、言語文化論究（九州大学）八、四七—五九頁。「朝鮮國語学生徒」のなかで、長崎県士族の武田と津吉（川本）が、朝鮮語の能力に優れていたとされるのは（本節注②6）、両者が対馬の出身で、はやくから朝鮮語に接していたからであろう。
- ③2 アジア歴史資料館資料「工兵大尉倉辻明俊外一名朝鮮國へ差遣及清國派遣ノ歩兵大尉小沢徳平帰朝被命ノ件」明治二六年九月、Ref. A0401000700°。東亜同文会編、一九六八「対支回顧録」下、原書房、三〇七—三二〇頁。
- ③3 アジア歴史資料センター資料、「外務省十等出仕池上四郎外二名清國牛莊ニ遣往探索ノ要件」明治五年八月、A03023010900°。
- ③4 東亜同文会編、前掲本節注②6、四〇頁。池上・武内ともに少佐であった。
- ③5 黒龍會本部編、一九〇八「西南記傳、上巻一」黒龍會本部、二二—六〇頁。
- ③6 アジア歴史資料センター資料、「美代陸軍中尉外五名同國へ差遣」明治六年一月、Ref. A0100001700°。同「島陸軍少尉外一名同上」明治六年二月、Ref. A01000017100°。
- ③7 アジア歴史資料センター資料、「清國朝鮮軍事等取調として被差遣の事及心得書網案、心得条目案」明治六年一二月、Ref. C08052181400°。
- ③8 アジア歴史資料センター資料、「支局へ支那在留官吏姓名ノ儀往翰」明治七年七月、Ref. A03030190000°。
- ③9 アジア歴史資料センター資料、「大原陸軍大尉外六人清國出張達」明治七年四月、Ref. A07061505500°。
- ④0 アジア歴史資料センター資料、「柳原特命全權公使 貴省入用の旨を以て北京國並縉紳全書買入代の件」明治七年九月、Ref. C09120212200°。「外務省より益満邦介於清國買入白河の図戻入の件」明治七年一二月、Ref. C0912246800°。「品川上海領事 長江國説不着の義に付云々品川上海領事より回答」明治八年五月、Ref. C09120279600°。
- ④1 アジア歴史資料センター資料、「清國在留の官員取締に関する件」

明治九年六月 Ref. C09060289300<sup>40</sup> 同、明治九年六月〜七月 Ref. C09060289400<sup>41</sup>。

④② 島弘毅、一八七九、満州紀行抜書、東京地学協会報告一(一) 一一二〇頁、同、一八八二、清國運河紀行、東京地学協会報告二(四) 一一七頁。

④③ 東亜同文会編、前掲本節注④②、二二二―二二六頁。

④④ アメリカ議会図書館には、この原因と考えられる「満州紀行附圖」(G7822<sup>2</sup>. M2 188. S5 Vault) があり、検討を要する。

④⑤ アジア歴史資料センター資料、「福原陸軍大佐清国上海ヨリ我長崎へ到着」Ref. A01100169900<sup>42</sup>。

④⑥ アジア歴史資料センター資料、「島陸軍中尉司婦朝」Ref. A01000054500<sup>43</sup>。「大原陸軍大尉外三名同上」Ref. A07061505500<sup>44</sup>。

④⑦ 広瀬監修・編集、二〇〇一「参謀本部歴史草案」第一巻、一四二頁以下。

④⑧ 広瀬監修・編集、上掲、一五七―一五八頁。

④⑨ アジア歴史資料センター資料、「長瀬海軍中尉外十名清国へ派遣」(ただしこの「海軍」はあやまりで「陸軍」が正しい)Ref. A01000054900<sup>45</sup>。

④⑩ 広瀬監修・編集、前掲本節注④⑦、一六五―一六七頁。

④⑪ 梶山鼎介、一八八三、鴨緑江紀行、東京地学協会報告、五(一)、三一―四五頁。梶山の派遣については、アジア歴史資料センター資料、「歩兵少佐梶山鼎介清国公使館附仰付られる等の件」明治三年三月、Ref. C07080346400<sup>46</sup>。

④⑫ 梶山、上掲、三二頁。

④⑬ 梶山、上掲、五頁。梶元は愛新覚羅姓であり、一八七九(光緒四)

一八八二(光緒七)年のあいだ盛京將軍をつとめた。

<http://npnhost.npm.gov.tw/tisgci2/tisquery?0-0-npmanac:TN%3D%A7%Cl%A4%B8>

④⑭ 広瀬監修・編集、前掲本節注④⑦、二六四―二六五頁。

④⑮ アジア歴史資料センター資料、「柴中尉清国より朝鮮国旅行の件」明治二年四月、Ref. C03020367300<sup>47</sup>。

④⑯ 東亜同文会編、前掲本節注④②、三〇七頁。

④⑰ アジア歴史資料センター資料、「島村中尉ノ廣東及福州へ派遣」(香港領事代理町田実一より外務卿井上馨宛報告) 明治一七年五月、Ref. B07090446500<sup>48</sup>。

④⑱ 酒匂による「山東省第貳圖」(アメリカ議会図書館蔵、G7823.S4P2.1882.S3 Vault) の注記。

④⑲ 小田の「湖廣雲貴旅行図」一七号(アメリカ議会図書館蔵、G7821.P2.s100.03 Vault) の注記。小田はこのなかで川の流れにより船の速度が大きく変わることになっている。

④⑳ 盛京省に関する図は、国立公文書館蔵(内閣文庫、和書、ヨ二九二一〇一七二)、いずれも一八八二年八月)。ただし「直隸省東部圖」については未見。

㉑ 「盛京省東部圖」は伊集院兼雄による同名の手書き地図(アメリカ議会図書館蔵、G7823.L4.188.L4 Vault)。「盛京省南部圖」は、小川又次、山根武亮による「盛京省第一圖」(一八八〇年、同、G7822.L4.1880.03 Vault)に対応する。また「盛京省西中部圖」の東半分は伊集院の「満州中部之圖」(一八八二年、同、G7830.s1000.M2)に対応するが、西半分に対応する図をまだ発見していない。

### 三 測量の技術と地図の集成

すでにみてきたように、陸軍将校たちの旅行に際して、朝鮮半島では朝鮮側の護衛がつきそい、中国大陸でも梶山鼎介の場合のように、同様の護衛が随行する例がみられた。こうした護衛は、同時に将校たちの活動を監視する役割をはたし、彼らは本格的な器械による測量を行うことはできなかったと考えられる。また、主要交通路をたどる旅行であり、それに沿うトラバース測量であった。こうしたトラバース測量では、かならずしもルートが閉合せず（ループを作らず）、したがって誤差のチェックができない場合もあったとみられる。このような状況下で行われた測量について、つぎにみていきたい。

上記海津三雄や梶山鼎介のものを含め、将校たちがのこした旅行記には、こうした点に関する言及はほとんどないが、アメリカ議会図書館蔵の手書き原図には、それをうかがわせる記載がみられる。倉辻靖次郎は「従営口至甯古搭城路上圖」<sup>①</sup>の一号（従溝營至大窪路上圖、一〇万分の一）の余白に、「注意／方向ハブウソールヘルニヘヲ使用シ／巨離（原文のまま）ハ時間及ヒ馬ノ歩度ニ依ル者トス」と述べている。この場合、「ブウソールヘルニヘ」は、フランス語の *boussole*（遊標（きこ）コンパス）で、今日簡易測量器具としてよく使用されるブランドンコンパス程度のものであったとみられる。また、距離は移動時間あるいは馬の歩数をカウントするという方法で計測されていたわけである。

類似の注記は酒匂景信の「従北京至牛莊旅行圖」の三号にもみられる。酒匂はまた、「従山東省煙台經黃縣萊州膠州安邱縣沂州等至江蘇省宿遷縣漁溝路上圖」<sup>④</sup>の備考で距離の計測についてつぎのように述べている。

巨離（原文のまま）ノ測量ハ驕子或ハ馬車ニ據ルモノニシテ驕子ハ一時間五千〇四十米突則チ五分間四百二十米突トス山中ノ難路ハ一時間四千八百米突則チ五分間四百米突トス馬車は一時間六千米突則五分間五百米突難路ハ一時間五千六百六十米突トス如斯豫定スト雖モ道路ノ景況又日雇ノ馬車ニ従ヒ其速力ヲ変スル甚シケレハ又加減ヲ加ヘサル可ラス（カッコ内引用者）

驕子（駕籠）や馬車の速度だけでなく、道路の状態等も考慮する必要があるとしている。

他方、朝鮮に派遣された海津三雄の「自居留地至文川郡路上圖」<sup>⑤</sup>では、地図に記載したルート以外に立地する地物の記載について次のように述べている。

此圖ハ路上製圖法ニ基キ羅針ト歩數トヲ以テ道路ヲ畫シ地物ハ皆目測ヲ以テ配置セシモノナレハ實地ニ於テ幾分ノ差違ナキヲ保セス夫ノ道路ノ險夷山川ノ位置等圖ノ尽ス能ハサル者ノ若キハ別ニ紀事アリ宜シク就テ觀ルヘシ

計測した部分と、目測による部分を明示しているわけである。また別に説明書があり、地図と対照すべきものであったこともわかる。こうした説明書は、「沿道図説」とよばれていたようであるが、まだ現物を確認していない。その内容は、すでにふれた『東京地學協會報告』掲載の紀行文に類似するものであったと考えられる。

この文章でもうひとつ注目すべきは、このような測量法を「路上製圖法」と述べている点である。これは路上測図ともよばれて、簡易な測量法としてひろく適用された。今までふれてきた地図のタイトルが、「路上図」とされている場合が多いのも、これに関連する。

このような測量は、陸軍将校たちが現地を持参した用具とよく対応する。一八八二年に中国大陸に派遣された倉辻靖次郎と牧野留五郎は、出発前に測量器具として「バロメートル（バロメーター）」（気圧高度計）、「フーソルベルニエ」、「双眼鏡」、「路時計」（歩数計と思われる）のほか、製図器具として「製圖器械」（製図用のパンタグラフか？）、「補備半円規」（予備の分度器と思われる）、「長定規」、「三角定規」、「復埵止米突尺」（二〇センチ定規と思われる）の貸与とともに、彩色等のための「画ノ具及彩色筆」、「製圖用ヘン及軸」（丸ペンと軸）、「鉛筆軟硬共」、「色鉛筆」、「透明紙」（トレースペーパー）、「ゴム」、「鷲ペン（ペン）」の支給を要請している<sup>⑦</sup>。現場で使う測量器具や製図器具は軽量で、めだつものではなかったことにくわえて、当時の路上測図のマニュアルに記されているような「携帯圖板」（携帯測板ともいい、画板のように紐で首へ肩にかけて用いる）に関する言及がない点も留意される。当時の路上測図では、これにはりつけた方眼紙にルートを記入しながら歩行するとされるが、作業の目的がすぐにわかるこの道具は使用できなかったと考えられる。すでにみた「清國派出將校

心得」の注意は、この点に関連するとみてよいであろう。

ところで、陸軍将校たちの手描き原図には、経緯度を記入するものと、記入されていないものがみられる。前者は中国大陸に関するものが多いが、朝鮮半島に関するものについては、ほとんど後者となる。将校たちは天測に必要な器具は携帯しておらず、とくに経度測定に必要なクロノメーターのような精密で高級な器具を利用することは、不可能であった。したがって、経緯度を記入するには、他の既存のデータを利用するほかはなかった。上記の酒匂景信「従北京至牛莊旅行圖」三号にみられる注記は、これを明確に示している。

経緯度ハ英国ノ書中ヨリ取りシモノナレ共實地大差ヲ生スルモノハ此度数ニ因ラサル所アリ他日ヲ待ツテ確定セルノミ他から得た天測によるデータに依りつつも、自身の測量の成果と大きな差があるものについては、採用できなかったわけである。他方、頼るべき経緯度データがない地域については、この記入をあきらめざるをえなかった。

このように作製された手描き原図は、のちに経緯度線の入った二〇万分の一図に編集される。以下、この点に関する検討を試みるが、その前に手描き原図とできあがった二〇万分の一図の特色をみておきたい。

手描き原図の縮尺は、一部の都市図などをのぞき、二〇万分の一と一〇万分の一が多い。また書き込まれたルートやそれに沿った集落、水系などは詳細をきわめ、記入されている地名も判読に拡大鏡が必要なほど小さい場合が多い。上記の路上測図のマニユアルに、「路上測圖一般ノ梯尺ハ二万分一トス」<sup>⑩</sup>とされているところからしても、一〇万分の一、さらに二〇万分の一は、いささか小縮尺にすぎ、得られた測量データを省略せずに記入すると、このようにならざるを得なかったと考えられる。こうして、やや無理をしてまで、提出図が小縮尺とされたのは、すでに規程があったことにくわえて、現場で測量されたルートの密度が低く、それ以上の大縮尺にすると、空白の部分がひろくなるという事情も関与していたと考えられる。

このように縮尺は規定されていたが、図の凡例記号についてはかなりのバラエティーがあり、また同じ将校でも、ルー

トによりこれに差がみとめられる。また時には沿道の景観を絵画にしているものもあり、彼らの個性が感じられるものもすくなくない。

これに對して、できあがつた二〇万分の一図は、一般的な地形図・地勢図の様式をもつ。朝鮮半島の場合は、全六八圖幅よりなり、この四隅には経緯度が記入してあつたと考えられる。⑩他方、中国大陸の場合は、朝鮮国境から北京周辺、さらに山東半島に達するもので、六三圖幅に達し、やはり経緯度を記入する。また、各圖幅で記入がみられるのは主要ルートのみで空白部分が大半をしめる場合がほとんどである。

上記のような手描き原図を集成して、隣接する図を相互に接続できる二〇万分の一圖幅を整備するのは、容易ではなかつたと考えられる。とくに経緯度の記入がない図、さらにはそれがあつてもわずかな地点にかざられる図を、矛盾なく集成していくことは、困難をさわめたであろう。『陸地測量部沿革史』の一八九五（明治二八）年の節にみられる、日清戦争時の地図の製図・製版に關連する作業概要を示す文章は、つぎのように述べている。⑪

前記地圖ノ主ナルモノハ隣邦二十萬分一圖（朝鮮及清國）奉天直隸兩省三十萬分一圖其ノ他諸局地圖假製東亞輿地圖等ニシテ此ノ急遽ノ際ニ於テ散漫零碎ナル資料ニ就キ同地異稱同韻異字ヲ比較校定シ特ニ僅少ナル既知ノ經緯度點ニ依據參酌シテ地圖ノ骨格ヲ作り且諸般ノ地誌旅行記等ニ據リテ地形ヲ稽ヘ地物ヲ補ヒ以テ外邦未開地ノ地圖ヲ輯成セントス其困難ハ實ニ意料ヲ絶スルモノアリシナリ……

ここでは、二十万分の一圖のほかに、「奉天直隸兩省三十萬分一圖」（輯製三〇万分一の圖）や「假製東亞輿地圖」についてもふれている。「同地異稱同韻異字」のあたりは、後述するようにとくに輯製三〇万分一の圖の作製作業に關係する。圖の編集にあたっては、手描き原図だけでなく、地誌や旅行記も参照しての複雑な作業であつたことを示している。

この作業に關連して、さらに高木菊三郎のつぎのような文章がある。⑫

……これらの測図は、秘密に測量されたものが大部分で、いわゆる路線測量で、まれに略測の経緯度を有する程度のもものが多く、そ



の製図にあたっては、止むを得ず画線を平均し、多角形を作り、さらにその誤差を配布（分）して、地点を定める等の苦心を重ねて完成したものであるが、……（カッコ内引用者）

閉合するルートについては誤差を確認し、それを配分して修正するというオーソドックスな方法がとられたことがわかる。二〇万分の一図の製版・刊行年については、現在までのところ中国大陸に関するもの（清國二十萬分一圖）についてのみ確認できる。アメリカ議会図書館・国立国会図書館で調査したものの概要を示すと、「明治十七年創製」とのみ記される場合が多いが、製版年月さらには修正年月を示すものがあり、製版年は一八九三（明治二六）年もあるが、一八九四年のものが多い。また修正は一八九五年となる。なお、一覽圖の製版は一八九四年九月で日清戦争の開戦まもない頃に、あわただしく作られたと推測される。

二十万分の一図について、もう一点言及しておくべきは、中国大陸側に関する地図の一部では、左側の欄外に、作図に際して使用した資料を示していることである。<sup>⑩</sup> イギリス製海図にふれるほか、図上に示したルートの測量時期と測量者の氏名を連ねている。この測量者が、手描き原図の作製にあたった将校であることはあらためていうまでもない。

一八九三（明治二六）年一月には、この二〇万分の一図の原図が一部完成していたようで、写真版で作製するように参謀本部第二局が依頼している。<sup>⑪</sup> 翌一八九四年八月になると、日清開戦をうけて、「朝鮮廿萬分一圖」の前線部隊への配布が依頼され、さらに同一〇月には、戦争の展開にもなつて「清國二十萬分一圖」がやはり前線部隊に送られた。<sup>⑫</sup>

以上のようにみえてくると、手描き原図に示された陸軍將校たちの測量成果は充分というにはほど遠く、日清開戦時になつてからうじて、朝鮮半島から満州南部、北京周辺、山東半島について最低限の地図が整備できる程度のものであったことがはっきりしてくる。

① G7824.Y45A1 s100.K8 Vault.

② 遊標（Vernier）の役割としては、羅盤の廻りを回転して目標物の

方向と磁針との角度を読みやすくする場合、羅針のくみこまれたコンパスカードの場合、さらに方位の読みとり精度をあげる場合が考えら

れる。

- ③ G7824.B4A1.s200.S3 Vault.
- ④ G7823.S4P2.1882.S3 Vault.
- ⑤ G7908.H2.1883.K3 Vault.
- ⑥ アジア歴史資料センター資料、「一〇月二八日大本営副官大生定孝発 参謀本部副官部御用取扱藤井包聡宛 朝鮮各地沿道図説送達方御取計」明治二十七年九月、Ref. C06061209100。
- ⑦ アジア歴史資料センター資料、「パロメートル他貸渡の件」明治十五年九月、Ref. C07080840000\*「製図器械他貸渡の件」同、Ref. C07080840100\*「画ノ具及彩色筆他貸渡の件」同、Ref. C07080840200\*。
- ⑧ 『路上測圖教程 全』（一八八五年頃）大阪大学文学研究科地理学教室蔵（391.9/RHK）。なおこの書物は発行元などの記載を欠くが、この時期の他の軍人用測量教科書と同じ体裁である。
- ⑨ 『路上測圖教程 全』上掲、一二丁。
- ⑩ 一八八四（明治一七）年の「測量局服務概則」につづく「地圖課服務概則」の第十八条では、「外邦圖ノ製法ハ別ニ定式ノ設アリト雖モ概シテ内國ノ假圖即チ二十万分一圖ニ準シテ製造スルヲ常トス」と述べらる。陸地測量部、一九三二「陸地測量部沿革史」陸地測量部、六四頁。

#### 四 初期外邦測量と日清戦争

これまで検討してきた陸軍将校たちの測量にもとづく地図が、日清戦争においてどのような意義をもったかについてさらにみておきたい。まずふれたのは、当時上記二〇万分の一図以外にも地図が作製されていたことである。

- ⑪ 朝鮮半島の二〇万分の一図については、現在のところ現物を確認できたのは防衛省防衛研究所千代田史料、一〇七二—一〇七七のみである。これは明治天皇が参照した図と考えられるもので、図郭のまわりが切り取られ、一部が裏側にはりつけられている。このため緯度経度の記載が確認しにくい。
- ⑫ 陸地測量部、前掲本節注⑩、一三二頁。
- ⑬ 高木菊三郎、一九六六『日本に於ける地図測量の発達に関する研究』風間書房、七二頁。
- ⑭ この点については、牛越国昭、二〇〇九『対外軍用秘密地図のための潜入盗測』第一編「外邦図」はどのように作られたか』同時代社、一五六—一六一頁も参照。
- ⑮ アジア歴史資料センター資料、「参人第五四号第一」、Ref. C07081943600。
- ⑯ アジア歴史資料センター資料、「八月一九日留守第五師団参謀長三上晋太郎発 参謀本部副官大生定孝宛 朝鮮二〇万分一図同一覧表之一義」明治二十七年八月、Ref. C06061159200。
- ⑰ アジア歴史資料センター資料、「一〇月二日大本営副官大生定孝発 第一軍参謀長小川又次宛 清韓百万分の一図一五〇部等送付」、Ref. C06061187200。

すでにふれた輯製三〇万分の一図は、朝鮮国境から北京付近までを全二七図幅でカバーし、記入する集落の密度も高く、二〇万分の一図のような主要ルートのあいだのブランクがめだたない。また水界を青、山地等を茶色で着色している。さらに全図幅の製版時期が「明治二十八年四月」となっている。一八九五（明治二十八年）年の三月には、下関で講和条約の折衝がはじまり、中国大陸での戦闘はほぼ終了していた<sup>②</sup>。この点からすれば日清戦争には役立てることができなかった地図ということになる。

もうひとつの地図群は、「十里方眼一図」といわれる二五万分の一図である。ただし、現在までの確認できたのは、盛京省の第三三号「旅順口」図幅のみである<sup>③</sup>。陸地だけでなく海上の大部分についても、一辺二・二センチの方格が記入され、明らかに中国の地図作製の伝統を示している<sup>④</sup>。またこの旅順口図幅からすると、盛京省について三七図幅あったことがわかる<sup>⑤</sup>。図幅の左肩には、「明治二十七年製版」と記入されており、一八九四年一月に十里方眼図が発送されたという記録も、これを裏付ける<sup>⑥</sup>。

高木菊三郎は、こうした十里方眼図について、「……支那製「皇輿全覽圖」ニ據ル繪畫式地貌表現法ノ「十里方眼圖」ヲ方眼ニ依リ伸圖編纂シ約二十五万分一梯尺ニ依ル遼東半島近傍圖トシテ戦用ニ供セリ」と述べている<sup>⑦</sup>。中国大陸では、一八八九（光緒一五）年には、毎方格一〇里の地図の整備が指示されたとされており、それを元図にしていた可能性が高い。ただし、「皇輿全覽圖」系の地図は、この十里方眼図よりはるかに小縮尺で、その元図になった可能性はない。

以上のような、二〇万分の一図、輯製三〇万分の一図、さらに十里方眼図を相互に対応する地域（遼東半島先端部）について比較すると（図2-4）、二〇万分の一図幅にみられる主要ルートと海岸線を骨格に、十里方眼図にみられる集落や山地を配置して、輯製三〇万分の一図が編集されたことがうかがえる<sup>⑧</sup>。主要交通路中心で、ブランクの多い二〇万分の一図の不足を補うために十里方眼図が整備されたが、両者の比較対照は容易ではないので、輯製三〇万分の一図で両者を統合したと推定されるのである。上記『陸地測量部沿革史』の引用にみられる、「同地異稱同韻異字ヲ比較校定シ」という文

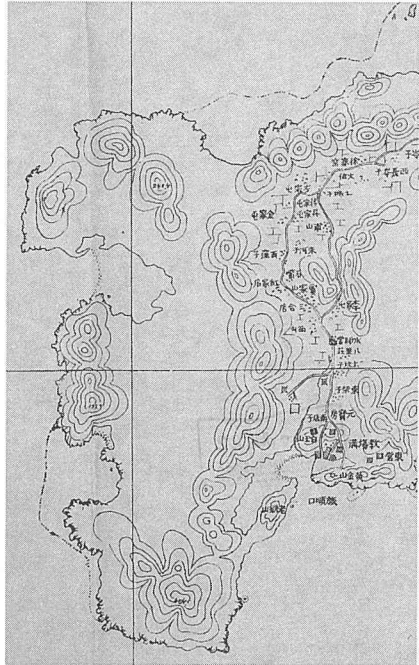


図2 (右上) 二〇万分の一の「金州廳旅順口」図幅、アメリカ議会図書館蔵(G7820 s200. J3)(部分、約56%に縮小)

図3 (左上) 輯製三〇万分の一の「旅順口」図幅、国立公文書館蔵(ヨ292-0182)(部分、約80%に縮小)

図4 (左) 十里方図の「旅順口」図幅、国立国会図書館蔵(YG819-2264)(部分、約73%に縮小)

言は、その作業の実情を示すものであろう。

このほかまとまった地図群として刊行されていたものとしては、「北京近傍圖」がある。縮尺は五万分の一で、北京市街を中心に全二四圖幅で構成されている。現在まで確認できたのは、アメリカ議会図書館蔵の版下用図で、製版時期は一八九四（明治二七）年である。<sup>⑭</sup>なお同館には、この元図となった酒匂景信らの手描き原図も見られる。<sup>⑮</sup>

こうした要地の大縮尺図として、さらに朝鮮の「釜山近傍」図（二〇万分の一、全四圖幅）、「漢城近傍」図（同、全六圖幅）、「元山近傍」図（同、全五圖幅）があり、やはり空白部分の多い図となっている。<sup>⑯</sup>「釜山近傍」図と「漢城近傍」図は一八八四（明治一七）年、「元山近傍」図は翌一八八五年に石版印刷されている。

以上にくわえてさらに言及しておくべきは、「假製東亞輿地圖」（二〇〇万分の一、全一〇圖幅、一八九四「明治二七」年製版）である。朝鮮半島から滿州南部、北京周辺、さらに山東半島と、日清戦争の関連地域をカバーしている。このうち朝鮮半島については、日本軍将校たちの手描き原図の成果が反映されていることを確認している。<sup>⑰</sup>またとくに秘密にする必要がないとして、一八九四年一月には小縮尺図として地図に対する一般の需要に応じた点も注目される。<sup>⑱</sup>なお、小川琢治は、假製東亞輿地圖が日露戦争当時には最新の東アジア図であったことを指摘し、ドイツやフランスの小縮尺図に成果が取り入れられたとしている。<sup>⑲</sup>短期間であったと考えられるが、国際的にはバイオニア的地理情報としての意義をもったことになる。

さて、以上を念頭におきつつ、さらに日清戦争における二〇万分の一図の役割を検討したい。前線における当時のこの図群の役割をうかがわせる資料としては、戦闘詳報に掲載された地図がある。このうち第五師団の一八九四（明治二七）年のものをみると、戦闘の経過を示すものは五十分の一〜五万分の一で、図の内容からみても現場で作製されたことが明らかである。縮尺二〇万分の一の図もみられるが、道路の補修や架橋箇所を示す図となっている。さらに小縮尺の図は、部隊の位置や移動経路を図示する。<sup>⑳</sup>

このような傾向からすれば、将校たちの手描き原図のデータを集成した二〇万分の一図は、主要な集落やルートを巨視的に示すもので、戦闘用の地図は、別に現場での偵察によって作製されていたと推定される。したがって、その戦闘における意義は小さかったとみてよいであろう。ただし、二〇万分の一図によって、上記の十里方眼図がもつ地理情報を、より近代地図に近いものに統合できたと考えられる。近代的測量が及んでいなかった地域に関する既存の地理情報の有効利用を可能にしたといつてもよい。

この場合留意されるのは、以上のような操作によってできた輯製三〇万分の一図が、日露戦争に際してかなり使われたと考えられる点である。後述するような臨時測図部（第一次）の測量がおよんだ範囲はせまく、広範囲の地理情報として、それはなお価値をもっていたことになる。

さらに言及しておきたいのは、一八九五年三月になって、軍事に関心の高い朝鮮王族（王子）に対する「参謀本部新製朝鮮国及清国北部ノ圖」<sup>200000</sup>「一揃」の献上が決定されたことである。ここで検討した二〇万分の一図が、中国大陸での戦闘がほぼ終了していた時期に献上されることになった背景には、王族側の希望のほか、図に対する軍事的評価、さらに当時の対朝鮮関係があったと考えられる。

- ① 国立公文書館に全点が収蔵されている（E292-0182）。この一一号「大孤山」図幅に一覧図が掲載されている。
- ② 原田敬一、二〇〇八「戦争の日本史一九、日清戦争」吉川弘文館、二五五―二五七頁。
- ③ 国立国会図書館蔵、YG819-2204。
- ④ この一辺が二〇里で、一里は五〇メートル強となる。
- ⑤ アジア歴史資料センター資料、「参月第四四九号第二」明治一八年三月、Ref. C07082112700から、直隸省についても一七図幅あったことがわかる。
- ⑥ アジア歴史資料センター資料、「藤井大佐発 亀岡大尉宛 十里方眼図及映入図發送」Ref. C06060840600。
- ⑦ 高木著・藤原編、前掲はじめに注③、三三九頁。
- ⑧ 日比野丈夫、一九七七「中国歴史地理研究」同朋社、三九三頁。
- ⑨ 江前進・劉若芳（整理）、二〇〇七「清廷三大實測全圖集——康熙皇輿全覽圖——」外文出版社所収の図をさす。
- ⑩ 野坂喜代松・和田義三郎・平木安之助・高木菊三郎・松井正雄、一九四四、明治三七八年戦役と測量（座談会）、研究蒐録地図、昭和一九年三月号、四一―五四頁にみえる高木菊三郎の発言では、二〇万分

の二図をもとに輯製三〇万分の一図ができたとするが、その十里方眼図との関係は明確ではない。

① G7824.B4A1 s50.P4 Vault.

② G7824.B4A1 188-.P41 Vault 43A1。

③ 国立国会図書館、大山蔵文庫六〇―一三三―二四―二五。

④ 渡辺ほか、前掲②節注④。

⑤ アジア歴史資料センター資料、「十一月二日 参謀総長熾仁親王発

参謀本部御用取扱陸軍少将児玉源太郎宛 第一仮製東亜輿地図即清韓百万分の一図一般の需要に於する件」Ref. C06061212200。

⑥ 小川琢治、一九〇四、日露交戦地方の重要な地図に就きて、地学雑誌、一八四、二六〇―二六三頁。なお、アメリカ議会図書館蔵の西歐諸国この時期の地図を参照したところ、小川の指摘を一部確認した。

⑦ アジア歴史資料センター資料、「二月一〇日 混成第一〇旅団戦闘詳報」明治二七年二月、Ref. C06062041200。さらに精査を要するが、戦闘詳報に掲載された二〇万分の一図（自劉家鋪至樊家台

作業略圖）は、同地点を示す図幅（一四六号「巖州」、一四七号「寛縣安東縣鳳凰廳」、一四九号「遼陽城」、一五〇号「敵」）に見られる図形とかならずしも対応しない。

⑧ アジア歴史資料センター資料、「第五師団戦闘報告 付図 第五師団位置其の他」明治二七年、Ref. C06062048300。

⑨ 日露戦争におけるこの種の地図については、金美英、二〇〇九、日露戦争時の戦場で偵察用に作製・使用されたと推定される地図について、外邦図研究ニューズレター、六、二〇―四六頁を参照。

⑩ アジア歴史資料センター資料、「地図至急送付の件」明治三十八年一月、Ref. C07082379500などを参照。なお野坂喜代松ほか、明治三七八年戦役と測量（座談会）前掲本節注⑩、四四頁における平木安之助の発言によれば、日露戦争に際して、遼陽以北の地図は二〇万分の一図しかなく、その経緯度には大きな誤差はなかった。

⑪ アジア歴史資料センター資料、「三月二日 大本営副官大生定孝 発 参謀本部副官御用取扱藤井包総宛 朝鮮及清国北部の図送付の件」Ref. C06061312900。

### むすびにかえて

これまで、明治初期の既存資料の編集による外邦図作製からはじめて、陸軍将校の朝鮮半島・中国大陸における旅行、測量技術、さらに手描き原図の編集と検討をすすめてきた。その結果、少数の将校によって行われた測量は、広範囲な地域をカバーするものではあったが、精度に大きな限界のある、密度の低いものであったことが明らかになった。これによって整備された二〇万分の一図は、主要中心地のあいだの主なルートを示すにすぎず、文字通り点と線の地図にならざるをえなかった。この二〇万分の一図は、十里方眼図のような既存の地理情報と組み合わせるとともに、仮製

東亜輿地図のような小縮尺図に集約されて、社会にも開かれていくこととなった。

このプロセスを他方で支えていたのは、当時欧米諸国が主導していた地理情報観で、成果の一部が地理学雑誌に発表されたのも、その一環と考えることができる。探検の対象となるような、地理的情報が少ない地域については、その収集プロセスは別として、軍事的にさしつかえないかぎり、得られた知見が公表されていた。これによって、あるレベルの地理的情報の共有ともいえる状況がとくに欧米諸国とのあいだで実現されることになったと考えられる。<sup>②</sup>

他方、日清戦争の進展とともに、二〇万分の一図の限界が明確になり、それにもなつて、当時の陸地測量部長、藤井包聰は臨時測図部（第一次）の編成を提案するにいたる。<sup>③</sup>

清國測図ノ義ハ從來特別ノ御計画モ有之候得共今回ノ事件結了ノ後ハ假令密行等ノ手段ニ依ルモ容易ニ為シ得可キノ事業ニ無之ト存候果シテ然ラハ此際陸地測量部ニテ一ツノ臨時測図部ヲ編成シ之ヲ大本營ノ管轄ニ属シ最モ簡易ナル測図式ニ依リ我軍隊ノ占領進軍セシ後方ノ地形ヲ可成測図セシメ他日ノ資料ヲ収集シ置クハ此時ヲ措テ他ニ得ルノ途無之ト存候……

中国大陸の測量は、従来の方法ではとても完成できないとして、臨時に新組織を編成し、戦争状態を利用して、前線よりも後方の地域の大規模な測量を計画したわけである。これはすぐに実行にうつされ、それまでの少数の陸軍将校による、簡易な器具を使用した密度の低い測量にかわつて、測量技術者を中心とした大規模な組織による、平板測量を主とした面的測量が行われることになった。<sup>④</sup> 同様の組織は、日露戦争時、さらにはシベリア出兵時にも編成され、これ以降の日本軍による外邦測量を特徴づけていく。またこれにともない、測量成果はきびしく秘密にされ、測量者の地理学雑誌への寄稿もなくなった。

本稿で検討した外邦測量を、このようなプロセスの中できめると、高木菊三郎が陸軍将校の測量から二〇万分の一図の作製までを、「第二期 實測（整備）時代」ではなく「第一期 準備（編纂）時代」に位置づけているのは、適切ではないことに気づく。この時期の地図作製は、外国製の海図や天測結果に依存していたにせよ、陸軍将校の独自の測量を基礎



にしているのであり、本格的な「第二期 實測（整備）時代」となる臨時測図部以後に対し、「初期実測時代」とでもいうべき段階をつくったのである。

謝辞 本稿ができるまで、アメリカ議会図書館の地理・地図部 (Geography and Map Division, the Library of Congress) および藤代真苗さんをはじめとする日本人スタッフの皆さんならびに外邦図研究会の皆さんのお世話になった。また本研究には、国土地理協会の助成ならびに科学研究費、基盤研究（A）（課題番号：14208007および19200059）を使用した。

- ① 高木は、「……本図は近代地図に比較すればその精度を欠くものである……」（高木、前掲はじめに注③（一九六一）、九一—一〇頁）と、二〇万分の一図を近代地図としていない。
- ② この種のプロセスは、他にも広くみられたと考えられる。チベットの秘蔵測量の成果がイギリスの地理学雑誌に掲載されたのも、その一環と考えられる。葉師義美、二〇〇六『大ヒマラヤ探検史——インド測量局とその密偵たち』白水社。
- ③ アジア歴史資料センター資料、「119 臨着九九五号 参謀本部御用取扱陸軍少将児玉源太郎発 参謀総長熾仁親王宛 清國測図の件」Ref: C06061244100° 藤井陸地測量部長の提案書（一〇月九日付）が収録されている。
- ④ 小林茂、二〇〇九、『外邦測量沿革史 草稿』解説、小林茂解説『外邦測量沿革史 草稿』解説・総目次、不二出版、五—二七頁。
- ⑤ 高木、上掲はじめに注③（一九九二）、三一七—三三二頁。

（小林 茂 大阪大学大学院文学研究科教授）  
（渡辺理絵 日本学術振興会特別研究員（PD））  
（山近久美子 防衛大学校准教授）

# The Travel and Surveying for the Preparation of Maps in East Asia by Japanese Army Officers during the 1880s

by

KOBAYASHI Shigeru, WATANABE Rie and YAMACHIKA Kumiko

After the Meiji Restoration in 1868, the Japanese military started the preparation of maps of East Asian countries, focusing on the Korean Peninsula and China. The *Sokuryo chizu hyakunen-shi* (*A Hundred Years of Surveying and Map-making*), an authoritative history of the modern cartography of Japan published in 1970, gives a brief account of the maps that were compiled after 1874 on the basis of traditional Korean and Chinese maps in combination with modern charts made by Western countries. However, this account is followed by a description of a wartime survey by the Rinji Sokuzu-bu (the Provisional Surveying Unit) during the Sino-Japanese War (1894-5), which implies it was the first survey conducted in foreign countries. A remarkable gap between the map compilation of early stage and wartime surveying in the middle of the 1890s is seen in this narrative.

Examining the maps of the Geography and Map Division of the Library of Congress, Washington, D.C. in March 2008, the authors found numerous draft maps of the areas concerned, which had been prepared by Japanese army officers during the 1880s. Following this discovery, the authors made a thorough investigation of these maps along with a study of the records on the travel and surveying of the army officers. The purposes of this paper are to provide an outline of the army officers' activities and to ascertain the important features of the maps.

After the establishment of the General Staff Office in December, 1878, several Japanese army officers launched a survey of the main routes in the coastal provinces of China. They took bearings with compasses and measured distances by pace, and the results were recorded on plotting paper. Most of the draft maps are middle scale (1:100,000 or 1:200,000) and describe roads and waterways that connect central places. We were able to confirm that some officers carried safe-conduct passes (護照) issued by the Chinese authorities. A high-ranking officer wrote in an article contributed to *The Reports of the Tokyo Geographical Society* that Chinese soldiers dispatched by a provincial office escorted him from Mukden (Shenyang) to Liaoyang.

An additional clause to the Japan-Korea Amity Treaty (Kanghwa Treaty), con-

cluded after the Soldiers' Riot in 1882, made it possible for Japanese army officers to travel throughout Korean territory, most of which had been closed to foreigners. Under the escort of Korean officials, they made field trips on the courses stated in the safe-conduct passes issued by the Korean authorities, and produced similar draft maps to those made of China.

Just before the start of the Sino-Japanese War, these draft maps were compiled into a collection of 131 sheets on a 1:200,000 scale, covering areas from Korea to the environs of Peking. However, the longitude and latitude and the coastline shown in them were derived from foreign sources, especially nautical charts made by Western countries. Blank space between the main routes prevails in most sheets. These maps that show little more than the routes between major places, accordingly, had limited use on the battlefields of the Sino-Japanese War and supplementary maps were prepared to compensate for their weaknesses.

On the Appearance of Taishan Niangniang:  
Rethinking the Origin of Bixia Yuanjun and the Growing Popularity  
of Her Cult during the Ming Dynasty

by

ISHINO Kazuharu

Bixia Yuanjun (the Primordial Sovereign of Azure Cloud) was one of the most popular deities in late imperial China. Her temple on the summit of Mount Tai attracted a large number of pilgrims. This goddess has long been a topic of special interest to scholars of history and religion in China, but recent studies have mainly focused on sources from the 17th century onward, and little attention has been given to those from the 16th century and earlier. For that reason, some previous works have taken the claims of sources compiled during late-Ming period as historical fact, and uncritically accepted the theory that this deity appeared as the daughter of the God of Mount Tai during the Song Dynasty. Therefore the questions of the nature of Bixia Yuanjun and when her cult became popular remain unsettled.

The central purpose of this study is to review all the source materials written about Bixia Yuanjun before the late-Ming period and to explore the origin of Bixia Yuanjun. Secondary purposes are to grasp late-Ming literati perceptions of Bixia Yuanjun and demonstrate the gap between the Bixia Yuanjun of written historical